

## 2026年度 大学入学共通テスト 数学ⅠA(本試験) 分析

試験時間 70分

難易度	出題分量	出題傾向
やや難化 2次関数に代表されるように、見慣れた問題を抽象的な条件に設定され解きづらいものがあった。	昨年と大きな変化はなし 文章量と計算量はやや減少したが、大きな変化はなかった。	変更なし 昨年同様、誘導は丁寧に設定されている。その上で、やや設定を変更して考える問題が目立った。
<b>総評</b> 昨年に比べ、抽象度の高い問題が増えやや難しくなった。また、例年第1問は数と式からであったが、今年は集合と命題からの出題ということで、最初から戸惑った受験生が多かったのではないかとと思われる。文章量はやや減少したとはいえ、相変わらず量は多かった。		

### 大問別分析

大問	出題分野・テーマ	配点	設問別分析
第1問	〔1〕集合 〔2〕図形と計量	30点	〔1〕数と式, 必要十分条件に関する問がなく集合の要素に関するものだけの出題であった。具体例こそあるが問題の設定の読み取りに時間を取られやすい。 〔2〕三角形の内心の性質や $\sin \theta$ の値と辺の比を利用して長さを求める内容であったが、誘導をうまく利用できるかが重要であった。ここも比較的時間を取られた受験生は少なくなかったのではないか。
第2問	〔1〕2次関数 〔2〕データの分析	30点	〔1〕最大最小に関する内容であるが、抽象的な条件から2次関数の式を決定する珍しい出題であった。特に(3)については抽象度が高く、手が付けられなかった受験生が多かったのではないか。 〔2〕東京オリンピック水泳(1500m自由形)に関するデータを題材としたものだった。昨年出題された仮設検定に関する設問はなく、外れ値に関する目新しい設定のものがあ、方針が立てづらい設問だった。

第3問	図形の性質	20点	昨年に続き、空間図形の内容であったが、誘導も丁寧でどの平面で考えればよいか分かりやすかったため、解きやすい設問であった。最後の設問も底面積が同じことから高さの比から体積に比につながることは想像しやすかったであろう。
第4問	場合の数・確率	20点	リーグ戦に優勝する確率が題材で、こちらも(1)の設問を利用して(2)を解く丁寧な誘導であった。しかし、勝ち負けの場合をきちんともれがなく調べられたかが重要で、ミスが出やすい内容であった。普段からしっかりと調べ数え上げの練習をしているかが差をつける要因になったであろう。

### 1・2 年生へのワンポイントアドバイス

昨年に比べやや難化し、受験生でも解きづらい内容が目立った。2次関数に代表されるように、比較的良く見る問題が見たことのない設定で与えられているような思考力を試されるものが随所にみられるので、普段の学習において単に答えが出せる勉強ではなく、どうしてそのように考えるのか？こういうケースはないのか？など、深く考える勉強をしていきたい。その上で、共通テストの過去問や予想問題などでしっかりと練習を積んでいこう。